

『南島へ南島から 島尾敏雄研究』

高阪 薫・西尾宣明編著（和泉書院、2005年4月）

文学部教授 高阪 薫

最近『「死の棘」日記』（新潮社、2005・3）が刊行され、『死の棘』及び島尾敏雄が、文芸誌等であらためて高く評価されている。『死の棘』は、小栗康平監督によって映画化され、かつてベルリン映画祭でグランプリを受賞したことはつとに有名である。トシオ・愛人・ミホの三角関係を中心に、泥沼の「家庭の事情」を赤裸々に描いている。松坂慶子と岸部一徳が夫婦の修羅場を演じて好評であった。

本書はそんな私小説面の研究ではなく、島尾敏雄と奄美・沖縄諸島＝「南島」との関係性を視座において編集した論文集である。島尾は、自ら琉球弧と呼ぶ「南島」と深く関わり、独自に提唱した「ヤポネシア」という造語をもちいて、戦後早くから日本および日本文化の多様性・相対性を取り上げた。島尾の文学や思想を考察するには、「ヤポネシア」を生み出した「南島」を抜きにしては考えられない。執筆者は「南島」との関係性を中心に、広く島尾文学を理解しようとする観点で、さまざまな視点や方法から自由に論じている。論陣を張る者は、島尾文学研究会（代表・高阪薫）を中心とする新進気鋭の若手から島尾を知り尽くしているベテランまで、多彩な顔ぶれである。当然「ヤポネシア」「南島」に関わる論考が多く、それぞれは、小説作品、南島エッセー、戦争体験等を、また民俗学の関連性といった多様な視点から論じている。

「南島」と「都市」の関連性では、神戸・東京・那覇を取りあげ、島尾の小説や思想における市民性、反近代性、漂泊性、ラビリンス性を究明している。島尾ミホの作品に関する論考や、在りし日の島尾に深く関わった3人の《証言》もある。このように独自のもの、補完しあうもの、相反する論考、実体験にもとづく証言もあり、このバラエティが本書の魅力の一つであろうと考える。

今年20周年を迎えた島尾は死後も根強いファンに支えられ、その文芸と思想は広く浸透している。戦後60年、今年はその15年戦争を語り継ぐ行事が多かった。一方で、きな臭い動きがむくむく生じている。特攻隊長・島尾敏雄が戦後書き綴った戦記小説は、いま一度読み直されていいであろう。島尾は、結局「お国が大事」であった時点から「人が大事」に回帰したのである。

今後の研究課題も多い。現在の島尾研究には、表現論的視座に立つもの、その独自の言葉への感性を解き明かそうとするもの、南島と戦争体験を重視するもの、ジェンダー論的観点から読解しようとするもの、島尾日記と作品の比較研究など、さまざまなものが見られる。「南島」との関係性も含め、アジア的な視点からも捉えられる必要がある。